

再び「子どもの世界を共に生きること」

津 守 真

子どもに手を引かれて一緒に歩いている時、子どもに要求されてそれにこたえる時、と
り立てて際立ったこともないそうした時を、子どもと一緒に過している時、私は子どもの
世界を生きているのだと思う。

私は、子どもとは逆の方向から子どもの世界を生きる。私の手を引くのは子どもであ
り、私は手をひかれて、思わぬところにつれてゆかれる。子どもを背負うとき、子どもは
私の背中によりかかって安楽であるが、背負う者は次第に重さを増してくる。その手の指
先に、私はその子の微妙な意志を感じ、背中の子どもの重さに、その日の子どもの心の状
態を察することができる。子どもの世界は、神秘的な仕方でおとなに伝わるのではない。

それは、子どもに応答することによって、一緒に過す営みのひとこま、ひとこまにおいて、おとなによって体験されている。

応答するというのは、子どもの行動に対してではない。内的理解の観点からいうならば、行動は心の表現だから、私は表現を通して、心に応答しようとするのである。私は手を引かれながら、子どもの自らの小さい自由への要求を指先に察知し、そのささやかな意志を実現させてあげたいと神経を使う。庭の隅のシーソーに向って、大胆に手を引いてゆく子どもには、そこでふたりだけの時を充実させようと、防寒衣をととのえて急ぐ。おとなの背中に全体重を投げかけてよりかかる子どもは、いまや、そのおとなに心からの信頼を寄せているのであろう。それが分かると、簡単におろすわけにはいかない。

子どもと一緒にいながら、私は、自分のことしか考えていないことがある。そういうときには、身体は子どもに近くいても、心は子どもから遠く離れている。おそらく、だれにとっても同様だらうと思う。

いま私がみているひとりの子どもは、この数週間とくに、朝きたときからしっかりと私を確保し、私の手を引いてシーソーにゆき、身を乗り出して私にお話をしてもらい、それから、私を傍にひき寄せていくつかの遊びを次々にする。その子どもが、ある日、いつものように、私の手を引いてシーソーにゆき、さんざん笑い合って時を過ぎた後、急に、私の顔を手でひっぱたき、頬べたをぎゅっとなつねってから、私に背中を向けて庭の真中に向

って歩いていった。私は後姿を見送ったが、そのあと子どもは室内でひとり粘土をし、他の先生を相手に何かをしていた。

最初、私は叩かれたとき、何も外的な理由は見当らなかったから、朝早く起きたとか、きのうの休日の疲れとか、何か身体的不快感があるのかと思った。しかし、その後の行為を見ながら、じきに私は思い返した。この数週間、私にとくに強い親愛の情を抱いたこの子どもは、自分の道を歩むことを求めているのだろう。そのためには、これまで親しんだおとなに、反逆し、けとばすことも必要なことだったのであろう。父親のような力あるおとなに、自らを同一化するほどに愛着を抱いたとき、子どもはそれによって何かを得た後、そのおとなとは違う独自の自分の道を歩むようになるのではないか。そのとき、おとなは、反逆して自らの道を歩んでゆく子どもを、祝福して見守ることが必要になるのだろう。保育者は、しばしば、子どもが自分自身を確立してゆくための踏み台となる。

このようなことを考えるに至ったのは、この子どもが、私とシーソーを楽しんだ後に、私を叩いて去るといふ行為をしたからであった。そして、この行為は、それに先立つ私と子どもとの数々の応答の過程から生れた結果である。

こうして後になって考えるとき、この子どもが私の手をひいてシーソーに向って庭を歩いている最中にすでに、この子どもの心には、私に親しむ心と、反逆して自分の道を行く心との両者の思いがあったのだろうと思う。しかし、子どもと一緒に歩いているときの私には、そのことはまだ見えていない。ただ、手を引く子どもに応答し、あとになると覚え

でもない数々の小さなことで笑い合ったり、語りかけたりしながら一緒に歩いてゆくのである。私は、その過程が保育の最もたいせつな部分なのだと思う。

その過程のひとつひとつに丁寧に応答してゆくことによって、結果として、その子どもの世界の本質があらわされた行為が生れる。

子どもがシーソーに向って歩いてゆくとき、かならずしもシーソーに到達することが目標となっていないのではないだろう。むしろ、私に愛着をもちつつ、私から自立し離れてゆこうとする思いの方が、子どもの心を占めていると云えるかもしれない。そのときにはそれは分らないながらも、私は外的目標にとらわれることなく、子どもの心の動きに合わせて、どこにでも一緒に動いてゆくのである。行先はシーソーでなくともよい。他のことに変わるかもしれない。子どもの心と一緒に、無心に歩んでゆくことが肝要である。

私は、毎日ふれる子どもの生活のひとつひとつに、子どもの世界があることを認識するようになったとき、毎日を子どもと過すことが一層たのしくなった。よく分らないままに、心と心で応じ合ってゆくうちに、子どもの世界の本質のあらわれる行為が生れる。きょうは、どんな行為が私のまわりに生み出されるか、それがたのしみである。

子どもと生活を共にする者は、自分だけの世界ではなく、子どもの世界を共に生きることがゆるされている。何と愉快なことではないか。

(愛育養護学校)